

白藍塾オリジナル

2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・経済学部

昨年度と違って、今回は二問とも説明問題。とはいえ、どちらもある程度の知識と思考力が必要とされる。

課題文は、汚染物質の排出量取引について述べた文章だ。地球温暖化問題では、国家間で温室効果ガスの排出量取引が行われているので、新聞などをよく読んでいる人はある程度知識を持っているはずだが、そうでない人でも、課題文をよく読めば、仕組みは理解できるだろう。

簡単に言えば、汚染物質の排出を全体としてどのくらいまで認めるか（排出許容量）を政府が決定し、それをライセンスとして、汚染物質を排出している各企業に割り当てる。そのライセンスは、各企業間で自由に取引できるものとする。すでに設備などが整っていて排出量の削減が容易な企業は、ライセンスの一部を売って、その利益でさらに排出量の削減を進める。削減の難しい企業は、ライセンスを買って排出許容量の割り当てを増やすことで、削減のためのコストを減らそうとする。こうして排出量の取引を市場に委ねた結果、政府が一元的に排出量削減を統制していたときよりもずっと低いコストで、効率的に、汚染削減が可能になったというわけだ。

設問Aは、課題文の空欄を埋めるという形式になっていて、一見とまどうかもしれないが、見た目にごまかされてはいけない。内容的には、普通の説明問題。排出量の削減について、政府の統制よりも排出量取引の市場に委ねるほうがなぜ有効なのかを、課題文の議論を補うつもりで説明すればそれでよい。その際、設問に従って、「汚染削減コストに関する情報がなぜ官僚には正確に伝わらないか」という問題を中心に考える。

汚染削減コストは企業によって異なるので、当然正確な情報はその企業にしかわからない。官僚が正確な情報を把握しようとしても、企業は自社の利益のために、なるべく削減すべき排出量の割り当てを少なくしてもらおうとして、削減コストを高めめに報告するだろう。それに対して、市場に委ねた場合、各企業は自社の利益のために、削減コストができるだけ少なくすむように取引をする。その結果、各企業が持っている削減コストの正確な情報がその企業の市場での行動に反映されるというわけだ。そうしたことを、字数内にまとめればよい。

設問Bも説明問題だが、これは「汚染削減は市場に委ねるべきだ」という課題文の主張の問題点を考えることが求められているので、その意味では小論文的かもしれない。排出量取引のような市場での取引が成立しない環境問題のケースを考えるとよい。たとえば、特定の地域での独占的な開発による環境破壊が起こった場合、そもそも取引する相手が存在しないので、市場による解決は不可能だろう。また、騒音や日照権など、量的な割り当てが不可能な問題も、取引の対象にはならない。砂漠化のように、複合的な要因が重なって原因を特定しにくい問題も、取引の対象にはしにくいだろう。

基本型Aを使って、最初に該当する環境問題の例を簡単に示した上で、市場による解決が難しい理由を説明するとよいだろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>